

## 平成 27 年度 年次講演会・国際シンポジウム開催報告

平成 27 年 6 月 1 日（月）から 3 日（水）にわたって、東京工業大学デジタル多目的ホール（大岡山キャンパス）において、年次講演会および国際シンポジウムが開催された。本稿講演会は、日本分光学会が公益社団法人に移行してから二回目の開催となる。参加人数も 180 名と、成功裡に終えることができた。

会場の構成は、年次講演会・国際シンポジウムが行われたデジタル多目的ホール、それに付属するポスターセッション会場および企業展示ブース兼、コーヒープレイクスポットとなっている。また、昼食時には、協賛企業による製品紹介（ランチョンセミナー）が設けられた。

ポスターセッションは、全 49 件を奇数番号(I)と偶数番号(II)に分けて、1 日目および 3 日目のランチョンセミナーの後にそれぞれ 90 分間行われた（写真 1）。

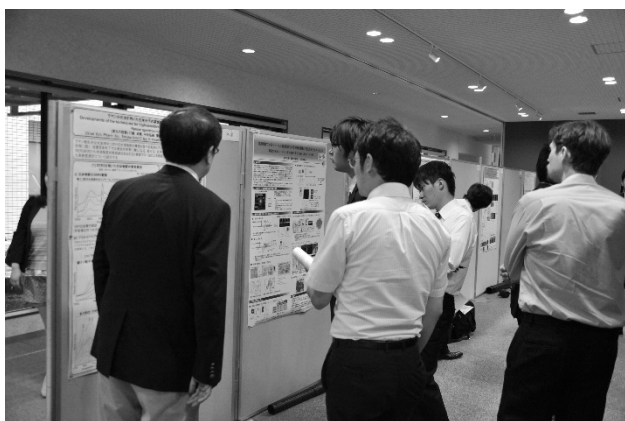


写真 1 活発なポスターセッションの様子

年次講演会は、佐々田実行委員長の開会の挨拶で始まった。1 日目午前中には一般講演 8 件が行われた。午後はポスターセッション I の後、5 件の一般講演が行われた。

その後、昨年度の学会賞および奨励賞の授賞式が執り行われた。学会賞は、藤井正明氏（東工大）の「先端的多色レーザー分光法の開発とその応用」、奨励賞は重藤真介氏（National Chiao Tung University、現関西学院大学）の「In vivo ラマン分光イメージングによる細胞内ダイナミクスおよび微生物凝集の物理化学的研究」、井手口拓郎氏（東京大学）の「光周波数コムによる超高速分光」に対して贈られた（写真 2~4）。

尾崎会長から賞状および記念品が手渡された後、三氏の受賞講演が行われた。

受賞講演終了後、恒例のウェルカムドリンクが、生協第一食堂ホールにおいて行われた。乾杯の音頭は鈴木副会長にお引き受けいただいた。1 時間という限られた時間であったが、受賞者の方々のスピーチとともに参加者同士の歓談で、賑やかな会となった。

2 日目は終日にわたり国際シンポジウム「分光と観測で

見る地球大気と宇宙空間」が開催された。プログラムは、当該分野で著名な国内外の研究者による招待講演 11 から構成された。

国際シンポジウムは、尾崎会長による開会の挨拶で始まった。以下に、招待講演者 11 名の講演内容について簡単に紹介する。

Kaley A. Walker 氏（University of Toronto, Canada）は、Solar occultation を用いた SCISAT/ACE ミッションについて講演し、得られたデータが地球大気のモニタリングにどのように活用されているかについて報告した。

笠井康子氏（情報通信研究機構）は、国際宇宙ステーションからの超伝導サブミリ波リム放射サウンダ(SMILES)を用いた大気ラジカル分子の観測について講演し、ClO、HO<sub>2</sub>、HOCl の日周変動の同時測定について報告した。

今須良一氏（東京大学）は大気科学における赤外サウンダの歴史と温室効果ガス観測技術衛星（GOSAT）プロジェクトの現状について講演した。

森野勇氏（環境研）は地上設置高分解能フーリエ変換分光計を用いた地球大気温室効果ガス観測ネットワークについて講演し、得られるデータが炭素循環の研究に広く用いられ、また衛星からのデータの検証に不可欠であることを示した。



写真 2 尾崎会長（左）と日本分光学会賞を受賞した藤井正明氏（東工大）



写真 3 尾崎会長（右）と奨励賞を受賞した重藤真介氏（National Chiao Tung University、現関西学院大学）



写真4 尾崎会長（右）と奨励賞を受賞した井手口拓郎氏（東京大学）

Jow-Tsong Shy 氏 (National Tsing Hua University, Taiwan) は、 $H_3^+$ イオンの $v_2$ 基準振動について光周波数コムを用いた中赤外レーザー一分光について講演した。

羽馬哲也氏（北海道大学）は、星間塵上での反応過程について、光刺激脱離および共鳴多光子イオン化を用いた実験装置を開発し、アモルファス氷表面での水素原子の拡散について議論した。

平原靖大氏（名古屋大学）は開発した中間赤外線高分散分光観測装置（GIGMICS）について講演し、東広島天文台のかなた 1.5 m 望遠鏡を用いた金星中間圏での  $CO_2$  の炭素同位体異常の観測について報告した。

Giel Berden 氏 (Radboud University, FELIX Laboratory, The Netherland) は、多環芳香族炭化水素イオンの赤外多光子解離分光について講演し、得られたスペクトルを理論計算のベンチマークとして用いることで、星間空間での未同定赤外バンドの帰属に貢献できることを示した。

川口建太郎氏（岡山大学）は、 $H_2F^+$ についてハーシェル宇宙望遠鏡を用いた低密度雲の観測および実験室での時間分解赤外レーザー一分光について講演し、宇宙空間での  $H_2F^+$  と  $H_2Cl^+$  の生成メカニズムの違いについて議論した。

荒木光典氏（東京理科大学）は、ぼやけた星間線（DIBs）の候補分子であるチオフェノキシラジカルとフェノキシラジカルのキャビティーリングダウン分光について講演し、これらの分子の存在量の下限値を報告した。

小林かおり氏（富山大学）は、星間分子のマイクロ波分光とその電波天文学への応用について講演し、特に内部回転を持つメチルフォルメートの振動励起状態の解析を行い、Orion KL での未同定線の帰属について報告した。

最新の研究成果に基づく講演者の発表内容と、聴衆との活発な質疑応答により、進展著しい研究分野の潮流が肌身で感じられる刺激的なシンポジウムとなった(写真5)。

国際シンポジウム終了にあたって、築山実行副委員長の挨拶があった。

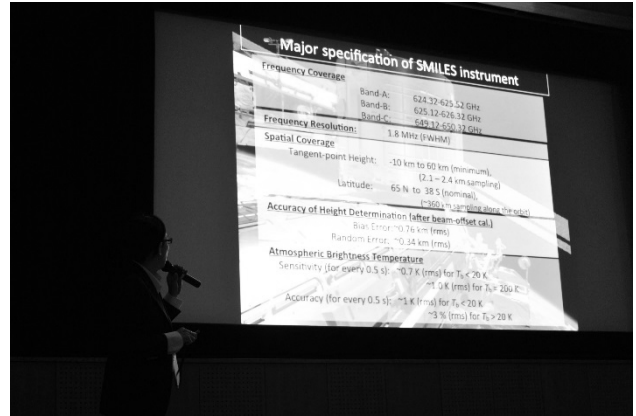


写真5 国際シンポジウムの様子

国際シンポジウムの懇親会は、ウェルカムドリンクと同じ生協第一食堂ホールにて開催された。乾杯の音頭は鈴木副会長にお願いした。会の半ばには海外からの招待講演者の Kaley A. Walker 氏にスピーチをいただいた。懇親会には、シンポジウム参加者とともに展示企業の担当者も参加して、なごやかな雰囲気情報交換ができた。

3日目は年次講演会のプログラムに戻り、12件の一般講演とポスターセッションIIが行われた。

また、1日目に引き続き、学会賞の授与式および授賞講演が執り行われた。学会賞は緑川克美氏（理研）の「高次高調波によるアト秒科学」に対して贈られた。

年次講演会のプログラムは、尾崎会長による閉会の挨拶によってすべて終了した。

会期中の昼食時(12:00~13:30)に開催された協賛企業によるランチョンセミナーは、3日間とも盛況だった(写真6)。



写真6 ランチョンセミナーの様子

本年次講演会および国際シンポジウム開催にあたり、広告掲載や製品展示ならびにランチョンセミナー等、多くの企業様からご支援をいただいた。以下に記して感謝申し上げる(50音順)。

アイ・アール・システム、島津製作所、スペクトラ・フィジックス、東京インスツルメンツ、ナノコントロール、

日本カンタム・デザイン、日本サーマル・コンサルティング、日本分光、浜松ホトニクス、フォトテクニカ、堀場製作所、WITec。

参考までに、平成 27 年度年次講演会・国際シンポジウムのプログラムは、以下の URL で公開されている。

[http://www.bunkou.or.jp/events/events1/2015/pdf/program\\_jp\\_150601-03.pdf](http://www.bunkou.or.jp/events/events1/2015/pdf/program_jp_150601-03.pdf)

来年度の年次講演会および国際シンポジウムは関西で開催される予定となっている。

(文責：小山貴裕)